View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Academic Research Repository at the Institute of Developing Economies

歴史から見る東南アジア -- 鈴木峻「シュリヴィジャヤの歴史 -- 朝貢体制下における東南アジアの古代通商史」（めこん、2010）（読書案内）

著者	田中 学
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	187
ページ	46-46
発行年	2011-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004272

読書案内

歴史から見る東南アジア

田中　学

鈴木峻『シュリヴィジャヤの歴史 ―朝貢体制下における東南アジアの古代通商史』（めこん、二〇一〇）

近年、アジアの国々の経済発展はめざましく、とくに中国とインドが注目されている。

両国は、いうまでもなく世界の四大文明の発祥地の二つであり、世界史のなかで大きな位置を占めてきた。東西の文化的・経済的交流は、当初はシルクロードのような陸路が中心であった。しかし、ある意味ではむしろ両国に先駆けて経済発展を始めたアセアン諸国は、いわゆる大航海時代以前の時代から海（水路）を通じてひとつの経済圏を形成していたと考えられる。そこでは、当然海上交易が重要な位置を占めた。

本書はそうした視角から、貿易国家としての「シュリヴィジャヤ」の歴史を描いたものである。また、その交易の中心形態として中国（唐、宋、明など、当然王朝は代わるが）への朝貢貿易を位置づけ、第一部「室利仏逝について」、第二部「三仏斉について」の二部構成をとっている。室利仏逝、三仏斉とも、漢籍に記されているもので、朝貢してきた「シュリヴィジャヤ」にそうした漢字をあてたものであろう。ただ、その歴史像には謎が多い。

従来の定説は、フランスの歴史家セデスによるシュリヴィジャヤの本拠地はスマトラ島のパレンバンであり、それは海上交易の要衝であるマラッカ海峡を制圧するためであった、というものである。

著者の第一の疑問は、このパレンバン説に向けられている。これには、三つの根拠が示されている。ひとつは、六七一年にペルシャ船に便乗して広東を出発し、インドに向かった唐の仏僧義浄の記録である。彼は、途中で室利仏逝に滞在してサンスクリット語などの勉強をしているが、そこは一〇〇〇人もの仏僧がいる一大仏教都市であったという。

だがパレンバンがそうした仏教都市であったという史跡はまるで存在しない。第二は、そもそもシュリヴィジャヤは扶南（ほぼ現在のカンボジア）の王朝が真臘（チャンラ）に追われてマレー半島に移ったもので、その際いきなりスマトラ島に移ったというのは、不自然である。第三に、東西交易においてマラッカ海峡の重要性はしだいに高まるが、当初はマレー半島横断ルートも利用されており、シュリヴィジャヤもマレー半島の拠点（まずチャイヤー）を制圧したのちマラッカ海峡に向かった、という説である。

第二部の三仏斉については、対中国の朝貢貿易における室利仏逝の三大「城市」であったケダ（マレー半島）とパレンバン、ジャンビ（スマトラ島）が、いわば連合体として室利仏逝の権益を継承した、というのが大まかな位置づけである。その後、ジャワのクディリ王朝によるジャンビ攻略、さらにはタミール王朝によるケダの攻略、南宋時代の「朝貢貿易」から「関税収入」への制度・政策の変更など、いくつかの歴史的事件を通じて三仏斉の様相も大きく変化し、明代に朝貢貿易が復活したときに勢力を維持していたのはパレンバンであった。これが、後々まで、室利仏逝＝パレンバン説を補強する結果をもたらした。

著者は、義浄の旅したコースを実際にたどり、旅行記の記述と現実の地形や遺跡などを具体的に対比することによって通説の疑問点をひとつひとつ点検している。他方では、漢籍や英文その他の文献調査と照合も行っている。その成果のひとつが、「朝貢貿易」の歴史一覧表の作成であろう。鶴見良行氏の研究などを通じて、最近、海からみた東南アジアの研究が進みつつあるが、こうした歴史研究の領域が拡大・深化することによってさらにその奥行きが広まるものと思われる。あるアジア研究者から「東南アジアの歴史は謎だらけです」というコメントを頂いたが、そうした謎がひとつずつ解明されて行くことは、大変興味深く、かつ楽しみなことである。

たなか　まなぶ／東京大学名誉教授（農学博士）

1938年生まれ　1967年東京大学大学院博士課程修了、専門領域は農業経済学・農業史。立正大学経済学部助教授、東京大学農学部農業経済学科教授を経て2010年3月まで愛国学園大学人間文化学部教授を務める。